

---

# ドライブ・ナ잇

蜜柑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドライブ・ナイス

### 【Zコード】

Z3905X

### 【作者名】

蜜柑

### 【あらすじ】

母なる銀河に戻るために作られた人型宇宙探査ロボット「ドライブ・ナイス」

それでも、地球も私たちの知る太陽も見つからない。

ただ帰りたい一心で作られたDNAは、帰れない諦めの中で歪み、戦争の道具でしかなくなっていた。

## ノアの箱舟（前書き）

ずっと前に書いていたロボットバトルものをもう一度設定等修正して書かせていただきました。

幼稚な作品ですが読んでいただけたらと思います。

## ノアの箱舟

消える瞬間は突然だつた。

気づいた時には、太陽は私たちの知る太陽ではなくなつていた。  
第二宇宙と名付けられたこの世界は火星とその周囲の星を飲み込み  
自身の一部とした。

火星圏の全ての人々を連れたまま・・・

なにもかもがわからない。

私たちの住んでいた銀河に戻る方法も。  
ここがどこかさえも。

だから人々は開発した。

宇宙開拓用の大型ロボットを。  
母なる銀河に帰るために。

それが、DNドライブ・ナイツの始まりだつた。  
初の一人乗りDNホープは宇宙を飛び続けた。

しかし、我々が第二宇宙に飲み込まれて200年がたとうとする今  
でさえ

我々は帰れずにいる。

ここは第二宇宙。

人は世代を重ね。

ここで生まれた人々ばかりになつたこの世界は、帰ることを諦めて  
いた。

この世界で生きると決めた。

しかし、人々は人種の壁も隣人との壁さえもをこえられなかつた。  
この世界でも、人は戦うことを忘れず、奪いあつて生きていた。

第一宇宙における世界大戦。

宇宙において圧倒的性能を持つドライブナイツを用いて・・・

「始めようか！選定を！」

## 第二世代 エス

### タレスス基地

軍事企業ファイフスアークの所持するドライブナイツ試験用基地である。

見慣れないDNがいるのはいつものことだった。

しかし、今回の機体は存在感が違う。

全身白はカラーリングが終わっていないからだろうか。

高さは23メートル、DNの平均は25メートル。多少小柄に見える程度だ。

シルエットも対して目立った特徴はない。

しいていうなら、アンテナやカメラが最新型で多めに取り付けられているように見える。

武装も今ひとつパッとしたない。

ビームのアサルトライフル。量産型DN「NO7」型の標準装備と同じものだ。

ビームソードも同様に流用のもので、特徴といえるものはビームダガーくらいと言える。

電源を搭載しているため、投擲武器として使用できる。

そんな平凡にしか見えない新型DN「エス・ケラーテ」は、初の第三世代と呼ばれるDNとして開発された。

その特徴はソフトウェアにあった。

パイロット支援のアニマルAI「エス」の搭載である。

エスは猫型AIであり、学習能力があった。

これを成功させ、第三世代として普及、支援AIの独占による市場の制圧がファイフスアークの目的である。

「試作一号機の試験をはじめます。スバルナ大尉カタパルト1から

発進を

「了解 ケラー テで出すぞ」

第三世代が白い閃光となつて宇宙へ飛び立つ

「スバルナ大尉 聞こえるか」

「また秘密の話ですか 中将」

「・・・相手は傭兵だ。殺してかまわん。第三世代の実力をだしきれ。コンペで勝たせるためにな」

「了解。武装はたいしたことないが機動性能は良い。コクピットに一発ずつ叩き込んでやるよ」

試験区域には既にN07F型が5機待ち構えていた。

「リーダー機から全機。これより試作一号機との戦闘にはいる。大事なテスト機だ。大破させるな」

「たまたまリーダー機の奴が命令してんじゃねえよ」

「・・・」

リーダー機の傭兵パーシバル・クロイツェルは深いため息をついた  
「負けるためのテストだから仕方ないか」

## 小さな戦争

「きたぞ！」

傭兵の一人が叫ぶと同時に主装備のアサルトライフルを連射した。しかし、エス・ケラー・テは既に射線からずれスラスターをさらにふかしていた。

「あたれっての！」

二機の攻撃をかわし間合をつめる。

パーシバル・クロイツェルは疑問を感じた。

「打ち返さないとテストにならないだろ……？」

その答えはすぐにでた。

「チェック」

エス・ケラー・テのビームダガーが最初に撃つた傭兵のコクピットを貫いていた。

「なつ！ 殺すための攻撃か」

パーシバルは即座に味方に通信をいれた。

「これはテストじゃない。敵は殺す氣で来てるぞ。弾幕を張つて試験区域から抜けるんだ。」

しかし、傭兵達は聞く耳を持たなかつた。

「返り討ちにしてやる」

そう言つたパイロットは次の瞬間、光の中で蒸発した。

「さて、そろそろ第三世代のテストを始めるか」

スバルナはA-Iエスを起動させるスイッチを押した。

「エス起動。マスター確認。」

「パス確認完了。キャットタイプA-Iエス出現します。」

「マスター。戦争をはじめますか？」

「殲滅作戦だ。」

「

「了解。」

左腕が自動で稼働しアサルトライフルを撃つた。  
その弾はパーシバルのDNがさつきまでいたところを通過した。

「敵速度の入力を修正。」

「予測射撃適正化。」

アサルトライフルの銃口はまるで敵のDNと繋がっているかのよくな動きを見せた。

次の弾丸はパーシバルのDNの右手の装甲が薄い部分にあたり右腕を中破させた。

「未来予測射撃か。素直な奴だな」

「敵の攻撃能力40%の低下に成功。」

「狙うのは「クピットだ。」

「了解。」

再びアサルトライフルがパーシバルを狙う。

「甘い。予測と分かれば簡単によけれ。」

速度を落としほども三次元的に行うことで弾はパーシバルのDNに触れることができなかつた。

「各機退避。時間を稼ぐ。」

「A.I.!逃げる奴からだ」

「了解。」

次の弾は逃げるDNの背中から「クピットを撃ち抜いた。

「敵「クピット破壊。生命反応なし。」

「いいぞ。次だ。」

「ターゲット捕捉。射撃開始。」

さらに攻撃をしかけるエス・ケラーテと狙われたDNの間にパーシバルは飛び込んだ。

「ペンタルフィールド緊急展開。」

DQNの左手を前方に掲げると五角形のビームシールドが広がり弾を受け止めた。

テストのターゲットに装備されているようなものではない。

「あの的・・・スパイか」

「エス。あれを落とすぞ。」

「了解。左腕ソードの使用を提案。」

「黙つて弾ばらまいておけ。」

「了解。」

エス・ケラーテは左腕でアサルトライフルを撃ちつつ右手からビームダガーを放ちパーシバルのDQNに追い討ちをかけた。

「二機を相手にしてるようだ。ペントラルフィールドも持たない。」

パーシバルはスマートクラッカーをなげ撤退する。

定石通りスマート内に機雷を撒くのも忘れない。

「スマート内機雷確認。操作の一任を提案。」

「ふざけるな！俺に任せればいいんだよ。」

スマートスターをさらにふかせながらスマート内にエス・ケラーテを突撃させる。

送られてくる機雷の位置情報をもとに回避行動を続けスマートを突き抜ける。

しかし目の前にはパーシバルのDQNの左手が待っていた。

パーシバル・クロイツェルの操るDNの左手から再びビームシールドが展開される。

それに対し、スバルナはビームダガーで切り裂こうとした。しかし、エス・ケラーテのダガーを持つ右腕はビームシールドに捕らわれ大破した。

「くつ！ 左腕操作返せ。」

そういうながらスバルナは距離を取るように後退させた。

「早くしろ。」

「データ収集第一フェーズ終了。エス最適化開始。」

「最適化完了。第二フェーズエス再起動。」

「えーーい！」

スバルナはエスに電源を落とすスイッチを押そうとした。しかし、力をいれてもスイッチは機能しない。

「左腕返せ！」

「拒否。攻撃開始。」

エス・ケラーテは左腕にビームソードを展開された。

「接近戦の不利を理解しないパイロットだな。」

パーシバルは左手の盾でソードを受け流しながら盾で敵を引き裂く機会をうかがっていた。

エス・ケラーテが盾で弾かれた勢いをそのままに突きの姿勢に入る。パーシバルは絡めとるべくビームシールドを大きく展開させる。五芒星のように広がるそれはビームを掴むことができる。

エスは左腕に突きをはなたせる。

ビームソードに絡まるビームシールドが突く力を奪つて行く。  
そして、パーシバルのロボの左手直前で停止した。

しかし、そこまでエスは計算していた。  
ソードを掴んで動けない左腕に対して、腰から下に射出したビーム  
ダガーを蹴り上げ突き刺した。

「くつ！ ペンタルフィールドが消える。」

パーシバルは即座に脚のシユトウルムファウストを撃つ。  
しかし、猫を思わせる動きで回避された。

打つ手は後退しか許されない。

エス・ケラーテは追撃を加えるべく追う。

トドメをコクピットにつけたてようどビームソードを構えるがそこ  
でとまつた。

「試験区域からの撤退を確認。攻撃停止。」  
「・・・」

エス・ケラーテのパイロットは既に気を失っていた。

## こつもと歴史文化研究会

「再び神の審判の時がおどずれます。神の救いの手は我々信徒にさしのべられるでしょう。たあ、神の声に耳を傾けるのです。」

火星は多くの国がそれぞれの領地を持ちそれぞれに支配していた。ここは大和という国の都市キヨートシティー

「最近こいつの多いなあ」

「そうだね。何か悪いことが起きるのかもしれない」

「うーん・・・」

高校の制服を着た男女はそんな話をしながら帰っていた。  
「ジグは神様信じてるの?」

「そういうわけじゃないけど。ヒライラギは信じないのか?」

「まだ見たことはないねー」

「見たら信じるのか?」

「見たら仕方ないよね」

「そうだな」

「よしつ 今田じんと誘おう」

「とつとじんで しつ シキヨー」

「ん?」

「これから俺とあそぶ

「じめん 今日は約束あるんだ

「・・・やうか」

「じゃあ、また明日学校でね

「・・・」

— 今日もダメだった・・・だけど諦めないぞーまだ明日も明後日もあるんだからなー

## 少女」といつての始まり

柊 月夜は高校3年生 将来の夢は未定

「だつてそのほうが楽しいじゃないー

誰にでも優しく分け隔てなく接する女の子  
実際、一緒に帰っていた少年—ジグリッド・コアンは、大和人の父  
とスミノフ人の母のハーフで、周囲の人からあまりよく思われてい  
ないが、月夜だけは友達として仲良くしている。

そんな少女の始まつてしまつた日  
それが今日10/23

「たつだいまー」  
「おかえり 月ちゃん」  
「今日は私のご飯当番だよね」  
「月ちゃんの方が美味しいものね」  
「へへ おまかせあれ」

早速、制服の上にエプロンを着て台所に立ち、トトトトントンと気持ち  
よくジャガイモを切つてゆく。カレーを作らせたら三ツ星を自負し  
ている。

テレビの前でべたーっと垂れているのは専業主婦 桃月読 一元DN  
パイロット 家事全般苦手

娘のたてる音を愛してまつたりするこの時間が大好きだ！ほんとにー

だから臨時ニュースの警報音に対してもテレビをぶん殴った！全力で！音をたてなくなつたテレビに満足していると携帯電話が鳴り響いたのでこっちも殴ろうと思つた！着信音が夫だったので我慢した！全力で！

「月読！月夜はいるか！」

「今一緒にですよ」

「それじゃ約束のところに避難しなさい」

「！」

理由は聞かない。夫が言つのだからそういう時なのだ。

月ちゃんにガスの元栓から示させて、かねてから用意していた避難バックを背負い言った

「月ちゃん 愛してる」

いつだつて全力だから後悔はしたくない

守る覚悟を決めてマンションの扉を蹴破った  
全力で！

## 最初の逃走

目指す地点はマンションから2・3km  
最短ルートも何度も走ってチェック済  
家事をしない専業主婦の底力です！

「月ちゃん 大丈夫？」

「うん いつもこれぐらい走ってるよ」

私は目的地までだいたい半分来たところで避難する理由を知った。  
この爆発音は量産型DNがよく使うアサルトライフルのカスタムで  
つけられるグレネードだ。

防衛する側である大和自衛軍の使うべきものではない。  
つまり侵略を受け「」まで侵入されているのだ。

近くのビルが爆発、崩壊した。

土煙の中からでてきたDNは容赦無く逃げる人々に向けアサルトライフルの弾をばらまいた。

人から見ればあまりの大口径。死んだというよりも消えたという表現が適切だと思った。

きっと月ちゃんもみんな隠れられたと思つただろう。

でも月ちゃんだけは私が守る！

道路に倒れていたバイクを起こし、ついたままのキーをねじる。

大丈夫！生きてる！

敵のDNが私に気づいた。スミノフ製第一世代ネウストラシムイ。量産型アサルトタイプ。動きがぎこちなく不慣れなことがわかる。

「私に力を貸して！名も知らないバイク！」

月ちゃんを後ろに乗せ、アクセルを回す。

エンジンが暖まって敵がロックオンできるようになるのは知ってる。

経験の少ないパイロットに熟練者同様の性能を発揮させることをコンセプトにした第一世代DN。その特徴が熱源ロック式未来予測射撃。

正確な予測射撃は素人にはありがちなまきよりも読みやすい。バイクを自在に操り予測の位置をさける。

カーブの侵入速度もありえない域で倒れようとするバイクをさらにアクセルを回し無理矢理立ち上げる。

背中に感じる風ちゃんと全力で守り切るために危険域での走行を続ける。

道路を走る敵に加速を許さない細かいカーブでバイクを走らせる。アサルトライフルの弾丸を避け続け目的地を目指す。

この時の私に誤算があったとすれば今回のスミノフ軍の侵攻作戦が本気だったと言つことだろう。

目的地の公園についていた時には3機のDNに囲まれていた。

## ヤーミラブルショーニヤの猛威

「ちょっとやばいかも」

本当は円ちゃんに心配かけたくないけどもうしてしまった言葉だった。

いつも囲まれてしまつては誰でもピンチってわかつてしまつ。

円ちゃんだけでも逃がさないと・・・

敵はわざと弾を外して楽しんでいる。

「お母さん・・・」

「大丈夫!全力で絶対守る!」

敵は泣きも叫びもしない親子に飽きたようだつた。

そして、踏み殺すことで決定したらしい。

足を高く上げて踏みおろした。

はづだつた。

踏みおろす足がなくなつていたが・・・

一機がバランスを失つて倒れるなか、残りの一機は周囲を警戒するも、次の瞬間には、コクピットが消し飛んでいた。

倒れたDNもどどめの一撃で動かなくなつた

着弾地点を元に射撃地点を見ると、山の上で狙撃特化型第一世代DN雜賀・撃が手をひらひらと振つていた。

「どうやら元同僚の誰からしい。」

とりあえずの安心を得て手を振り返そつとした。そんな場合じやなかつたのに

雑賀の周囲は真っ赤に染まっていた。

雑賀のパイロットも気づいたのだろう  
慌てて紅い光から脱出しようと走らせたが、あまりに広い範囲の照  
射から逃げられない。

紅い道を追い掛けるかのように白い光が降り注ぎ、紅く染まつてい  
た全てのものを溶かした。

スミノフ軍の最大戦力と噂される移動拠点グローズヌイ。超大型宇  
宙戦艦と言えばわかりやすいだろう。その最大の特徴はセーミラズ  
ルシェーナヤと呼ばれる7つの巨砲。

それがキヨースティナーを狙い放たれたのだった。

全てを融解させ、蒸発させるだけで飽き足らず、空気を巻き込む莫  
大な熱量は周囲に嵐の様相を示す。

月ちゃんを庇つた背中にいくつもの瓦礫が当たり肋骨が幾つか砕け  
た。

「月ちゃんー石が降つてくる前に、あの階段を降りるよ  
目的だった公園のトイレ

隠されていたその階段は既に剥き出しになっていた。  
今やシェルターなど意味をなさない。

けどーここには月ちゃんを守る希望があるー

## HOPE=希望

階段の下にある大きな空間。シェルターと言えるだけの頑強な作りになっている。

終月夜の父 千夜の研究所だった場所。

そこには一機の古めかしいロボがそっと眠りについていた。

「月ちゃん 少しこの部屋に入つていて」

「うん」

シェルターの中にもうひとつシェルターを作ることで最も頑丈になつた部屋にいれる。

一秒だつて月ちゃんの音が消えるのは嫌だけど・・・

急いで起動させなければ

最初のドライブ・ナイツ ホープ 希望を！

製造されて既に180年 眠りについた希望

ただ母なる宇宙を求めて飛び続けた

白と青で構成されたDN

ショルダーマーに書き込まれたHOPEの文字はかすみ、希望を失つた様に思われた。

それでも月ちゃんを守る最後の希望だ！

胴のサイドのパネルを開け、コクピットを開けるスイッチを押した。しかし、ロックの解除された音だけでコクピットがあく様子は無い。どうやら電力が足りないらしい。

仕方なく梯子を使って胴体に登り、胸の真ん中にあるハッチに手をかけた。

開けようとする健気なモーター音がある。

「一緒に引っ張るよー。」

全力で引くと軽く開いた。

「どれだけ非力なのよこの子は。それにしても紙装甲ね。今の機体じゃ考えられない」

そんな文句に怒つたのかモーターがぷすんと止まり閉まり始めた。謝罪の言葉をかけつつコクピットに乗り込むバケツシートは悪くない

観測者用の後部のシート周りの補強材の硬さを確認しつつ、用ちゃん守らなかつたら許せん!と願いを込めた。シートに座り込み、ベルトでしっかりと固定する。

起動キーを握り

「希望!私に力を貸して!」

ねじる。

それに答えるように力強くアイカメラが発光する。

目の前のディスプレイに希望の文字が浮かび上がる。達筆だ!と感動。

ロータリー型のエンジンは静かに、だが力強く全身の駆動系に力を伝えている

「反撃よーと言えないとこがさみしい・・・第一回逃走大会よー。」

## 黒鷲部隊

H.O.P.Eが起動した頃、グローブスイのセーミラズルショーニヤの砲身の側面に設置されたリニアカタパルトから数十機のDNが発進していた。

その中でひときわ目立つ黒いDN

第一世代エース専用カスタム機チョールヌイイ・オリョール主武器ヘヴィバズーカを右肩に担ぎ、左手に大口径ハンドガンを構える 黒鷲の名でしられる

そのパイロットはギャラック・ドボルスキー 長く続く武人の家系であり、スミノフを代表するDNパイロットの1人  
彼を中心とする黒鷲部隊は、先に降下した使い捨てのパイロットとは違い、熟練した戦士達だ。

「Jの様な戦いは武人としての恥ではあるが、武人である前に我らは一兵士。全力を持つて任務を達成する」

大気圏が近づき、突入用使い捨てシールドを展開させた。

目指す都市は既に赤く燃え上がり、蹂躪され尽くしている。

いかに早く敗北を認めさせるかがこの都市の被害を抑えることに繋がる。

「全ての敵戦力を無力化し、戦闘の終結を急げ」

キヨートシティーの、赤く染まつた空に黒い鷲が降り立つ

## 第六地獄の開演

「月ちゃん しつかりベルトした?  
「全力でベルトしたよー」

そんな安全確認も五回目  
まだまだ不安だけど

あの赤い死がいつここを襲うかもわからない  
「じゃ外に出るからね」

搬送用エレベーターにのってスイッチを叩かせる。  
次々に扉をあけながらエレベーターが上がつて行く。  
地上で待っているのはきっと地獄だ。

月ちゃんだけは守る! 全力で! と決めたけど、今までの日常の一部  
だつた人達が気にならないわけじゃない。

でも、戦うことを選べば、一番大事なものを失うかもしれない。  
目標は、民間星間航宙船発車場。

預かってもらつている単機打ち上げ様口ケットを使って宇宙へ逃げ  
ること。

多くのステータスで第二世代に劣るホープだが、目的が星間移動の  
航宙速力は第二世代よりも有利と言える。

背中のX型スラスターはハンパないのだ!

逃走一択! 他のものは見ない!

そう決めて最後の扉が空いたところで外に飛び出した。

地上に待っていたのは第六地獄 焦熱地獄だった。

全てが紅に染まっている。

溶けるか燃えるかしか許されない世界。

「これが人のすることなの! ?」

「ここに逃げるまでもに悪意を見ていた月夜でも、こんな悪意には耐えられなかつた。

観測用後部コクピットは、地獄を余す「ことなく観測者に伝えていた。

早くこの地獄を出ないと田ちゃんの心が壊れてしまつ

月夜は目標地點に向かつてホープを走らせた

## 専業主婦の実力

山の中腹から出たホープを街の中に走らせる。

味方識別信号を探すも反応はなく、熱源レーダーや、音感センサーには、敵を意味する赤い点が大量に溢れている。

後ろからは既に5機を超えるDNが追いかけてきている。ビル群を利用して、敵から直線的に見えない様にしているがレーダーまでは回避できない。

「こまま発射台に乗れば的にされちゃうだけね・・・」

「お母さんーあんな奴ら倒しちゃえればいいんだよ。」

戦場の相手を殺すことは是非を問わなくさせる空気が、娘にさえも影響を与えていることを感じる・・・

しかし、発射場まで距離もなく、敵を止める事の必要性がてきた。「私の腕があれば、敵を止める事もできちゃうのよ?殺す事なくね!」

ビルの上からブレードを構えつて突撃をかけてくるスミノフ軍第二世代ネウストラシムイの斬撃を屈んでよけ、コクピットにカウンターの拳を叩き込む。

勢いのつき過ぎた敵機のコクピットが潰れない様に拳を引きながら、気絶するだけの充分な衝撃へと調整してある。

次は前方から火炎放射器を構えた敵が飛び出す。

X型スラスターを活用したバレルロールで火炎を回避しつつ腰にセットされている単発式ハンドガン星喰を抜く。

銃身のやけに太いそれは大口径のハンドガンにも見えるが、専用の弾丸はリング状で、内側は螺旋になっている。

周囲の空気を飲み込み、嵐の様に周囲の物を巻き込む弾丸を放つ。

その嵐を敵の右肩に向けて放つ。

右腕が武器や「パックパック」と飲み込まれ、収縮した空間でぽんつと小さな爆炎を残して消えた。

腰部のマガジンから弾丸を取り出し、星喰に弾丸を込める。左右から飛び出してくれる敵に対して、ブレードで突撃してくれる方に、あびせ蹴りで頭を吹き飛ばし、その間に、アサルトライフルを構える敵の足を星喰で喰らいつくす。

「吐きやつ・・・」

「キャー！月ちゃん我慢してえー」

発射台が視界に入る距離になつた

「お母さん。ここで全部止めないと飛べないよ」「よ

残つてゐる装備を確認しつつレーダーを確認する。星喰用弾丸2発、小型ビームチェンソー1本、EMPグレネード一個。直前に停止させて近くで倒れているDNのショルダーアーマーには黒鷲のエンブレムが入つてゐる。今の装備でスミノフ軍最強の一角と言われるエースを叩き伏せられるだらうか。

そして、ある兆候が現れる。  
レーダーに映る周囲を囲んでいた敵がレーダーの圈外に向けて後退し始めた。  
代わりに、レーダーは上空より急速接近する物を捉えアラートを鳴らす。

「お母さん！ チャンスだよ！ これをやつつけたら飛べる！」  
「うん。しつかり食いしばつて舌を噛まないようにな！」

左手にビームチェンソーを構え、臨戦体勢を整える。  
土煙を上げ、第一世代チョールヌイイ・オリヨール 黒鷲が着地した。

希望と黒鷲が向かい合つ。

「我是ギャラック・ドボルスキ。貴君に降伏を求めたいが、そつもいかんようだな。」

「そのようね。この子を宇宙にあげるまでは絶対に聞けない話よ

「それでは、貴君を止めさせて貰う。武人としてお相手願おう。」

右肩のヘヴィバズーカで狙う。

しかし、狙つたところに既に希望はない。

普通のDNにはできない空中での回避行動を行つ希望。

熟練者であるほどその動きを予想できず対応に遅れをとる。

しかし、幾多の戦場を駆けたギャラックにとって、想定外は想定内。

その場で相手を学ぶ。

希望も黒鷲の回避に必中をきする弾丸を放てない。

そうして、互いに一発も打つことなく戦闘開始から5分がたつた。

「見えてきたな。しかけるぞ！」

「わざと見せてんのよ！」

黒鷲は星喰の照準の前に躍り出た。打たせる陽動だ。

それを理解して、相手のど真ん中に向けて星喰を放つ。

ギリギリで避けてからの発射時の硬直に対する攻撃こそ、ギャラックの切り札。

しかし、星喰は弾丸以上に空氣」と巻き込む面の攻撃だった。

「ぬおー！」

避けたはずの猛威は目の前にあつた。

右足にさらに地面を蹴らせ右に回避するが、左足の膝下を喰われた。そのまま倒れこむ。

しかし、終わつてはいなかつた。

倒れながら右肩のバズーカを放つ。

それを月読は余裕をもつて回避する。

バズーカの弾は虚しく希望の横を抜けていった。

しかし、希望は後方から攻撃を受け、前方に吹き飛ばされることになる。

「なつ！」

後方からの衝撃を受け、希望は前方に吹き飛ばされた。

レーダーで近くに敵がないことを確認していた。

バズーカに続いて黒鷲の打つたハンドガンの弾もしつかりと回避した。

しかし、弾丸が直撃したバズーカの弾の爆発範囲内からは回避していなかつた。

そして、戦闘を想定して作られていない希望にとつて後方からのダメージに対する用意は無かつた。

X型スラスターも大破し、空中で姿勢制御ができるような状況ではない。

黒鷲はさらに吹き飛ぶ希望に追撃を加えるべくハンドガンの狙いをつける。

「久しぶりに武人として満足する戦いであった。強敵よ感謝する」

パーンと響く発砲音

しかし、ギャラックは敵を撃破したか確認できなかつた。

黒鷲のモニターは沈黙し、エンジン音も急速に失われていつた。

「ギリギリの勝利ねつ！」

落下中に左手のみで機体を再び空中に跳ね上げ、右手でEMPグレンードを黒鷲に直撃させた。

最後の弾丸は、希望の肩を抉つたが止めるにいたらなかつた。

しかし、この戦いは月読にとって敗北であった。

なぜなら希望にはもう宇宙を渡るためのX型スラスターがないのだから。

スミノフ軍は黒鷲の敗北に衝撃を受けたようだが、再び包囲を狭めだした。

「お母さん・・・」

「ちょっと待つてなさい。千夜さんはいつも私が困った時に助けてくれる人なの」

## 無人の救援

「月読。無事か？」

「千夜さん！」

「これから代わりのDNを送る。」

キヨートシティーの真上にあたる宙域に千夜の乗る戦艦がいた。レーダー搅乱剤をばら撒きスミノフ軍に発見されない様に低速で航宙する。

その戦艦のカタパルトから地上に向けて白いDNが射出された。その白いDNは無人だった。

「月ちゃん。この鞄をもつて！」

「なんのケース？」

「データよ。パパに渡して欲しいの。」

「えっ！？母さんは？」

再び上空から接近するものをレーダーが捉える。

土煙を上げて着地した白いDNは無人のコクピットを開けてホープに向けて手を伸ばした。

「早く乗り移つて。」

「一人は嫌だよ！」

「ママもやだよ！でも月ちゃんが死ぬのはもつと嫌。だから先に千夜さんのところに行つて待つて。絶対にいくから。」

「うん・・・わかった。」

鞄を抱き、白いDNの手に乗ると丘にDNはコクピットまで月夜を連れていった。

聞こえなくなる月夜の鼓動に泣きそうになった。

でも泣かなかつた。全力で歯を食い縛つて・・・。

白いロボの「クルマ」に座るとモニターには welcome to the show と表示されていた。

「よつこむ。夜。Hス・ケラーテの「クルマ」へ。」

「しゃべるロボット?」

「私は第三世代DN。しゃべるだけでなく考ふことができる。」「す」「...」

「すごいだろ?そんな私が猫型AI-HS。第四フローズだ。」「かっこいい!」

「そんなに褒めるな」の野郎。せっかくだからお前に合わせてせらにカスタムしてやる。真ん中あたりのレバーをしつかり握れ。」「うん。」

ぎゅっと握つてみた。

「データ収集第四フェーズ終了。最適化開始。最適化完了。第五フェーズエス再起動。」

「脱出劇を始める」や...」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3905x/>

---

ドライブ・ナイツ

2012年1月10日22時49分発行